

サッカー部の女子マネージャーが試合に勝つごとに、1枚ずつ服を脱いでくれたら

「俺たちはどうやったら、勝てるでしょうか。いつもいいところまでいってと思うんですよ」

T 高校サッカー部キャプテンの吉澤は、顧問の森門と、副キャプテンの竹内を前にして、とうとうと話し出した。

「うちには、俺もいるし、中学時代は県選抜に選ばれてた竹内もいる。2年も1年にも実力があるうまい選手がいるし、実際レギュラーになっている。いいメンバーはそろっているのに、勝てません。先生、俺たちには一体何が足りないんでしょうか？」

吉澤の真っ正直な言葉に、顧問の森門は少しとまどいを感じた。

50を越えた森門は、ずっとサッカー部の顧問として、いろんな高校生を見てきた。

この吉澤は、その中でもトップクラスで、真っ正直な生徒だった。

森門は顧問としてそれほど厳しく指導しない。だから、吉澤のようなタイプがキャプテンを務めてくれているとありがたいことではあったのだが…。

「それがわかってたら、俺がとっくにお前らに伝えてるよ」と森門が苦笑いを浮かべながら言う。

練習試合がT高校で行われた。

1-2で試合に負けた後、他の部員はみんな帰ったけど、吉澤が、顧問の森門と副キャプテンの竹内に部室に残ってもらっていた。

副キャプテンの竹内は、吉澤と森門を交互に見ながら黙っている。

「強いて言うなら、何でしょうか？」と吉澤が食い下がる。

「強いて言うならかあー」と森門が腕組みしながら考えた。

今日の試合も、全体的に見れば、T高校の方が内容としては圧倒していた。

前半の早い時間に、エースの吉澤が点を取り、1-0で前半を折り返した。

後半は、ややフワツとした感じで入ってしまい、同点に追いつかれた。

でも、内容ではやはり勝っていたので、決勝点をどこかで取れるだろうと誰しもが思っていたけど、それが取れずに終了間際に逆に相手に決勝点を奪われて負けてしまった。

「あんまり、こういうこと言いたくはないんだけど」と森門が前置きをしてから話し始める。

「やっぱり球際とかかな。1つのプレーに対する執着心というかな。そういうところが、足りないと思う。お前ら、自分たちでもわかってると思うけど、けっこうまい奴多いじゃん。単純な球の扱いとか、テクニックとか、1つ1つのプレーの質とか。今日の相手と比べて、明らかに勝ってたじゃん。それなのに今日も負けた。なん

でだと思う？」

森門が、吉澤と竹内に投げかける。

「竹内、なんでだと思う？」と森門が副キャプテンの竹内を指名した。

竹内はすっと息を吸い込んだ後、話始める。

「先生が言った通り、球際のところなんじゃないでしょうか」と竹内が答えた。

竹内は、中盤の司令塔のポジションだ。

サッカー部らしい、さわやかな見た目で、学校でも女子にかなりモテている。

女子テニス部に彼女がいた。

サッカー部のマネージャには手を出すなよと森門は言っていた。

だから、竹内は部活はそれなりにやるが、遊びの方もかなり充実している。

真面目な点取り屋の吉澤とチャラ男の司令塔の竹内。

いいコンビといえば、いいコンビなのだが、チームが劣勢になったときは、案外もろい。

吉澤は、必要以上に焦りだし、チームに余計な声掛けをしたりして、焦燥感をもたらす。

竹内は、「あーやべーな」というオーラを出して、チームに嫌な雰囲気をもたらす。

そうやって、いつも T 高校は負けてしまうのだった。

普通に実力通りに力を出せば、それほど突出した強豪校がない県なので、県大会を制し、全国大会に進んでもおかしくない実力があつた。

特に、吉澤と竹内が 3 年となった今年が一番

のチャンスだった。

「球際のところで負けないようにするためにどうしたらいいと思う？」と森門がさらに問いかける。

吉澤が話し出すかなと、森門は思っていたけど、話し出したのは竹内だった。

「なんか、俺らって、いつも淡々とやりすぎているように思うんです」

竹内が話し出し、森門と吉澤が耳を傾ける。

それほど、1つの勝ち負けにこだわらないタイプの淡白な竹内としては珍しいことだった。

竹内も勝ちたいという気持ちは、吉澤と同じだった。

「なんかこう、執着心というか、この試合に勝ったらこれが手に入る。なんとしてもそれを手に入れるぞっとか。そういう感じがないんですよね」

「それは確かにそうだね」と吉澤が同意する。

「まあそれはそうとして、じゃあどうするよ」と森門が口にする。

「マネージャーじゃないっすか」と竹内が言った。

「マネージャー？マネージャーがどうした？」と森門が問う。

「例えばですよ、先生の前でちょっと言いづらいんですけど、試合に勝ったらマネージャーが服脱いでくれる、みたいな」と竹内がいたずらっぽく言った。

「あほか、お前。そんなん絶対だめだ」と森門がすぐに言う。

「ですよねえー」と竹内が言った。

「さあ、もう今日は帰ろう、帰ろう。また今度みんなで話し合いでもやったらどうだ」

森門はそう言い残して、部室を去っていった。

「さて、俺らも帰ろうぜ」と竹内が吉澤に声をかける。

「それいいじゃん」と吉澤が言った。

「え？なんのこと？」と竹内が言う。

「さっきの、マネージャーに脱いでもらおうってやつだよ」と吉澤が目を輝かせながら言う。

「いやー、そりゃ俺はいいと思うけどさ。やっぱ無理でしょ」と竹内が言う。

「いや、もう 1 回ちゃんと考えてみよう」と吉澤が言った。

こうなったら吉澤はもう止められないぞ、変なスイッチ入れちゃったなと竹内は思ったが、少しうれしくもあった。

吉澤と竹内が話し合い、女子マネージャーたちに試合に勝つごとに服を部員たちの前で、1 枚ずつ脱いでもらうよう頼むことになった。

部員は、3 学年合わせて、31 人いる。

マネージャーは、全部で 6 人、学年ごとにきれいに 2 人ずついる。

その女子マネの 6 人に、次の大会である全国大会の予選の県大会で 1 回戦から試合に勝つごとに服を 1 枚ずつ脱いでもらう。

大会は 2 カ月後に始まる。

県大会はトーナメント式で、6 試合にすべてに勝てば、優勝で全国に行ける。

T 高校は去年は 2 回戦で負けた。

でも、実力を出し切り、球際と気持ちで負けなければ、全国だって夢じゃない。
それは自分たちが一番よくわかっていた。

靴下右、靴下左、ジャージ上下、そしてブラジャーとパンティ。

これで 6 枚になる。

県大会優勝で、女子マネージャーの 6 人が 31 人の部員たちの前で素っ裸になるという算段だ。

「当然、普通の頼み方じゃ絶対却下されるぞ」と竹内が言う。

「わかってるよ。筋を通しておくことと、後はみんなで頼み込むしかない」と吉澤が言う。

吉澤と竹内は、改めて、顧問の森門を部室に呼び出して話をした。

女子マネージャたちに勝ったら脱いでもらうよう頼むことを 2 人は森門に伝えた。

当然、顧問であり、教師である森門には承服できることではなかったけど、2 人があまりにも真っすぐだったのも、少しだけ言葉を濁した。というか、実質的には、容認するような言い方をした。

「下心とかはあるけど、正直に真っ当に頼め。断られたらきっぱりあきらめろ」

「絶対に、事件みたいなことにはするな。そこはちゃんとお前ら 2 人がコントロールしろ」

「俺は、この件については、何も知らないことにする。薄情なやつだと思うなよ。俺には教師と